夏祭りが過ぎて

夏休みも終って秋風が吹き始めて、いわゆるお祭りの後のような何かもの淋しいような9月を迎えました。

今年も各地域で夏祭りが行われました。それぞれの地区で工夫を凝らし、協力し合いながらに夏祭りが開催されていますが、地域力を高めていくためにも素晴らしい事だと思っています。

観光協会主催による「しろさとふるさとまつり」も開催することができました。昨年は各種事情もあり開催できませんでしたが、今年は若い人達が中心となった実行委員会により、雨模様の天候にもかかわらず、沢山の方の参加により賑やかに終る事ができました。

始めは観客と踊る人がはっきり別れていましたが、太鼓や囃しの音頭が熱ばんで来るにつれ、観客の中からも踊りの輪に加わって来て、二重三重の輪ができていました。「踊る阿呆に見る阿呆」という事もありますが、確かに盆踊りは全員参加のような形で楽しむ事が祭りも楽しくなるし、雰囲気も盛り上がっていくのではないかと思います。

昨年開催しなかったときには、「盆踊りが無くてさびしい」とか「お盆に帰省しても楽しみがなくなった」とかの声も寄せられました。その方々は多分参加されたかとは思いますが、もう少し職場や団体の参加があっても良かったのかとも思っているところです。

私も1時間程輪に入って踊りましたが、手と足を動かす、歩く、笑う等の動作には、健康上も、また介護予防の運動にもなるのではないかと考えながら「踊る阿呆」になりました。

文芸しろさと

俳句

残業の瀬音やさしく夜の秋　飯田　勇一

秋の風濁れる池に鴨遊ぶ　山崎　正行

亡き父の好みしところ端居せり　和田　範子

梅雨寒の薬草風呂の一人かな　田所　厚子

亡母が好みし石竹の赤咲けり　鯉渕　寿美恵

名水を掬ひて汗の沈みけり　阿久津　あい子

郷に来て心底染まり青田風　飯村　愛子

応援歌勢ひ余り雲の峰　いそべ　きよ

初螢水の音にも光りけり　仲田　まちゑ

萩の揺れ還暦祝ふ酒旨し　森　静江

蝉しぐれ森の中なる美術館　今瀬　多代美

土砂降りの心地よき音青すだれ　飯村　昭子

固まって丈を等しく花すすき　高橋　芦江

麦茶入りのやかんぴかぴか誰もゐず　竹内　幸子

祭壇に万の白菊母逝けり　瀬谷　博子

短歌

花嫁の座にある吾娘へ夫の唄ふ「長持唄」に祝宴静もる　大森　久子

大陸の冷たき高気圧と暖かき太平洋高気圧の争ひか梅雨は　高堀　よしの

一本の雑草にも法の伝へゐる思ひに慎みて墓を掃除す　佐川　あや

財団法人産業教育振興中央会より孫に御賜金と表彰状受く　杉山　みちこ

初なりの西瓜を愛でつつ見廻るに一足早く烏は食めり　宮本　ふみ江

蛙啼くあはひに美しき鶯のこゑも混りて天然合奏ぞ　所　美恵子

「著我の花」垣根に添うて雨に咲く慎ましやかにまた晴れやかに　青柳　京子

細きフキを正油と酒で煮しめたりほろ苦き味久女の句想ふ　山形　式妙

自衛隊は故国に還る日近きとかとく帰りませ不戦の国なれば　藤原　千代

空の色こぼれて咲けるやつゆ草の小さき藍にいのちを伝ふ　渡辺　千紗子

がれきの下息絶えし母の腕の中に赤子生きゐしとふジャワ島の地震　秋山　愛子

奥山の谷間に咲きし白百合の色あざやかに匂いたのしむ　卜部　まさ子

梅雨の暮れ霧に霞し山並が墨絵のごとく暫し見とれり　岩下　通子

ふれあいに行きて語らう良き友と梅雨の明けるの待ち遠しいと　岩下　美知野

この夏も娘贈りし風鈴を軒に吊るして涼を楽しむ　阿良山　ウメノ

山青葉霧立ちこめる白づくめ自然おりなす静かなる里　富田　欽子

真夏日の続くも処暑の過ぎし夜は虫の声聞こゆ遠く近くに　山口　栄

バス降るれば土なむるほどに曲がりたる腰に耐え歩む短歌教室まで　薄井　ひろ

半夏生の白き花群ゆらぎいる音なく降れる梅雨の一日を　枝不美

すぎゆきの楽しきことのみ想はれて逝きにし友のことは覚えず　片見和枝

梅雨どきに何訴へて啼きわたるほととぎすか声胸に沁み入る　川上千代子

竹林の葉ずれの音も涼やかにて木もれ陽流る梅雨のひととき　島愛子

乗り遅れたる列車遠退くうつろさを償ふ鳩ゐていらだちもなし　多田志保子

嫁ぎたる吾が娘の安否問いくる教へ子の親の心はひびき来　坪井きよ子

摘みたる茶も消毒液も運びにし軽トラ見送る今日廃車なり　萩谷登喜子

背の孫に身体の重味感じつつ寝顔確かむ窓ガラスにて　和知美智子

面映ゆく花嫁の母の席に立ちこみ上げやまぬ涙堪ふる　冨田佐智子

川柳

子宝と言う宝石が三つある　山本隆荘